



JSPS London

巻頭特集 今JSPS Londonがオモシロイ!

「はじめまして!」

新スタッフ座談会

新企画 JSPS London INTERVIEW The 絆

在英大使館・松永氏に聞く

2分でわかる!

英国高等教育の今後

JSPS London

NEWSLETTER

No.29

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター 2011年4~6月 ニュースレター

センター長の視点	2	小野理事長 ロンドンセンター来訪	9	英国内における震災支援	14
巻頭特集 今JSPS Londonがオモシロイ!	3	知っているようで知られていない「Fish and chips」A to Z	10	立命館大学英国事務所開所記念シンポジウム	15
University of Yorkシンポジウム	6	Pre-Departure Seminar and Alumni Evening開催	11	ぼりーさんの英国玉手箱	15
平松幸三のご存じですか?	7	外国人特別研究員(欧米短期)2011年度第2回募集締め切る	12	英国学術調査報告 2分でわかる英国高等教育の今後	16
JSPS London INTERVIEW The 絆	8	スタッフ写真館 今月の1枚	13	JSPS Programme Information	18

センター長の視点

平松幸三 ロンドン研究連絡センター長



不都合な真実の追及

ソポクレス作『オイディプース王』は、ギリシア悲劇の中でもとりわけ名高い。主人公が「父を殺し、母を犯す」のは、男が抱く無意識の願望「エディプス・コンプレックス」である、とフロイトが精神分析理論の構築に用いたことも与って有名になったのであろう。

物語は大略こうである。テーバイの王に王子が生まれたとき、「この子は父を殺し、母との間に子をなす」という神託が下された。ために王は子の殺害を命じるが、預けられた者は殺さずに山に捨てる。成人した王子オイディプースは、テーバイに向う途上、道を譲れ、譲らぬ、で諍いとなった相手、父王を殺めてしまう。テーバイではその知恵が認められて王になり、先王の妻イオカステを産みの母とは知らずに娶り、子をなす。神託の成就を阻もうとした父王の試み虚しく、神託は成就されたのである。そうとは知らずに王となったオイディプースは、先王殺しの犯人の探索を命じる。しかしその過程でさまざまな証拠を吟味するうちに自らが王殺しの犯人かもしれないとの疑いを抱き始めるが、身の潔白を確認するために追及を一層厳しくしていく。周囲の者もそれに協力し、オイディプース＝犯人説を潰すために努力するのだが、それにもかかわらず、というよりその行為を通して、神託の成就が紛う方なく確認されることとなる。結果、イオカステは

自殺し、オイディプースは目を潰してテーバイを去る。

ここで注目されるのは、真実が不都合であるかもしれないと疑っても、その追及を疎かにしないオイディプースの姿で、そういった価値観—主知主義—が古代ギリシアで重きをなしていたことである。実際、イオカステは犯人探査の過程で真実に気づき、オイディプースに対し追及を止めるよう進言するが、彼はそれを聞き入れなかった。不都合であろうと、真実は明らかにされねばならぬ。古代ギリシア人たちが、「知」を重視していた証左であろう。

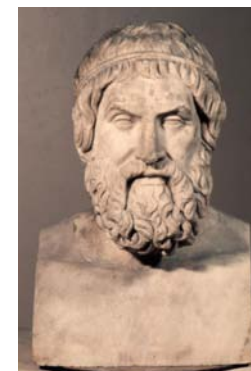
科学は本質的に主知主義であり、少なからぬ例外があるにせよ、社会的に不都合かどうかを問わず真実を追及してきたし、それゆえに科学は大方の信頼を勝ち取ってきた。またガリレオのように、社会的に不都合な真実を明らかにしたために迫害を受けた科学者も少なくない。主知主義こそ科学の生命線であり、そのために科学者は人生を賭けることもある。だが、オイディプースの悲劇にもみるように、主知主義がときに残酷であるのは、医科学的解明が、患者にとって死の宣告に等しくなることがあるのを想起すれば十分だろう。

「知」を「情」「意」に優先させるべきかどうか、議論が残るだろうが、西洋社会においては、真実の不都合さそのものより真実を隠蔽するほうの罪が重い、という観念の強いことをよく感じさせられる。西洋社会では隠さない、と言っているのではな

い。日本に比較しての相対的な私の印象であり、その淵源がこの作品に認められる。ただ、日本も近年ずいぶんと変わってきたことは認めなければフェアではないだろうが。

もう一点注意したいのは、テーバイにとって王殺しの犯人を上げることは絶対的に必要なことであった。オイディプース個人にとっては不都合でも、血筋ではなく才能を認められて後継した王としては先王殺しの犯人探索の手は緩められない。何が不都合であるかは、立場、見方によって左右される。ある立場の者にとっては不都合な真実が、別な立場の者には知らねばならぬ真実であることは、往々にしてある。情報を得た者は、開示の判断権限をもつわけだが、そこに自己や組織の「情」「意」を入れると、情報操作に陥りかねないし、情報に関しては特権の行使になる。情報開示度・透明性が民主主義のバロメータのように言われるのは、そのゆえである。

「情」や「意」で覆うと真実は曇る。2500年前にこの問題にひとつの答を示したソポクレスは、なんとも見事ではあるが、彼がデモクラシーの世界に生きたからかもしれない、とも思う。



ソポクレス像
© Trustees of the British Museum

「はじめまして!」新スタッフ座談会



JSPS Londonは7人のスタッフのうち毎年3人以上が異動するのが常のユニークなオフィスだ。それに加え、異なる組織から派遣される烏合の衆。そんなスタッフ達を惹きつけ、そして日本の学術振興というミッション遂行へと駆り立てるロンドンセンターの魅力について聞いた。

ー日本ではどんなお仕事をされていたんですか。

高橋 文部科学省で学術振興を担当していました。特に大型プロジェクトを進めるための「ロードマップ」を作る仕事は印象深いですね。日本初の仕組みづくりだったので、米国や英国など海外の事例を研究し、スタートからラストまでやりぬきました。その時に調べていた英国に実際に身を置くことになるとは思っていませんでしたけど…。

齋藤 僕は東京大学で「事務担当者検索システム」を作りました。条件は自前でやること、つまり予算ゼロだったので、「はじめてのPERL」というような本を何冊も買って、職場でも家でもずーっとプログラムを書いていた時期がありました。寝ている間も夢の中でプログラムを書いているような感覚だったなあ。たった2人でやり遂げたプロジェクトでしたので、最初に動いたのを確

認したときは、本当に感動しましたよ。だけど本当の試練は、利用のフェーズだったと知るのもうちょっと先でした(笑)。

松尾 九州大学の病院で採用されましてその1年半後にJSPS東京本部でアジアの多国間交流を担当していました。まだ就職して間もないので自分をかけて打ち込める仕事とはなにかを模索しているところです。

加賀 松尾くん、まじめやん。私は大阪大学で約300人のTA(ティーチング・アシスタント)の人事の仕事をしていました。また、JSPS東京本部では二国間交流事業を担当していました。プレゼンの機会も頂いてとてもやりがいがありました。

ーJSPS Londonでのお仕事を教えてください。

高橋 英国の学術・高等教育情報の収集





齋藤 智 Tomo SAITO 〈副センター長〉

北海道出身、35歳、常に花粉症。ジョギングで「ビールと健康の両立」を目指すも34歳あたりから徐々にバランスが崩れ70kgの太台に突入。7月に英国で第一子出産、育MENへの変身に挑戦中。1999年に東京大学へ就職。2004年から2年間青年海外協力隊としてジャマイカへ派遣。その後、東京大学工学部、渉外本部を経て、本年4月より現職。



松尾 勇太 Yuta MATSUO 〈国際協力員〉

長崎県出身、27歳冷え性。暖房設備が脆弱なフラットでロンドンの冬を迎えることに、今から不安を感じる毎日。2008年九州大学へ就職。病院で2年間の勤務を終った後、JSPS国際学術交流業務研修に参加。センターではボケ担当。オートロックの自宅から放り出されたため、バスルームの小窓から侵入するところを、危うく通報されそうに。海外生活での歯痛をリスティンによって見事克服。夏のロックフェスに向けアフター5はCamden Townに通う。

を行っています。日本ではラインでの仕事が多かったですが、ここではアドバイザーとしてピンでやっています。自分で決められる自由度が高い分、受動的な仕事を効率的にこなす他に、自ら積極的に動いていけるように地盤作りをしているところです。

齋藤 副センター長としてオフィスの管理から人事労務、経理、財務、国際・研究交流、広報など全体をみています。これらの仕事は過去の経験を活かしてできますが、チャレンジングなのはレセプションなどでの交流ですね。英語もわからないし、場慣れしていないということもありますが、JSPS London副センター長としてどのように立ち振る舞ってよいのか。任期中にどれくらいできるようになるか、自分でも楽しみです、せっかくのチャンスなので、できるようになるまでロンドンで仕事させてもらえたら嬉しいです(笑)。

松尾 財務・経理・施設・ITを担当しています。イギリスの電球の取り替え方とかはメッチャウまくなりましたよ。日本では経理の仕事は経験がないので毎日断続的にストレスを受けています。ある会社の請求書で実際の金額より安かったことがあります。こちらの経理では請求書と支払い金額が同額じゃないといけなくて、正しい高い金額

に訂正してくれとお願いしたら、クレイジーと内心思われていたと思います。英国では筋が通っていればOKなんです。また仕事のやりとりも日本と違います。日本ではメールを使いますが、電話が主流です。こっちではメールやFAXを2、3回送ってもまず返事がないですね。ですから勇気を出して電話をしないといけないんです。いつか英語でミスしちゃいそうですよ(笑)。

加賀 松尾くん、ヘマせんようにな。私は庶務と広報を担当しています。先日ヨーク

大学で自分の研究課題のインタビューを受けて頂いた方がとても親切でした。こちらではコネクションを非常に大事にしているんだと思います。メールやFAXの機械的なコミュニケーションだけでは、新しいコネクションを作るのは難しいですよ。

—英語は上達しましたか。

高橋 全然ダメっすね。ただ外国人にビビらなくなりましたよ。「俺は外国人だからわ

からない」といえるようになったことが大きな前進です。

加賀 開き直った大人は怖いですね(笑)。高橋さんが英語で堂々と電話されていたのを今朝見かけましたよ。私はオフィスの電話をとることが多いのですが、最近はあまり英語では困らなくなりました。わからなかったら聞き返せばいいですし。な、松尾くん。

松尾 僕はむしろ後退したような気がします。赴任当初の銀行口座開設のときに窓口でテンパってしまって「Calm down」と銀行員に慰められたことがあります。なるべく何を言おうか事前に考えて話すようにしているんですが、最近慣れてきたのか、何も考えずにいっただけだと結局、頭が真っ白になって以前より話せなくなってきましたね(笑)。

齋藤 松尾くんと席が隣ですが、電話で悪戦苦闘しながらもきっちりと経理の書類を添付してくるのは、たいしたものですよ。書類不備で差し戻したときの松尾くんの表情はまるでムンクの叫びそのものでした。僕





高橋 亮 Ryo TAKAHASHI (アドバイザー)

秋田県出身、32歳の健全な草食系男子。結婚2年目。愛車のハーレー・デビッドソンにまたがり、バーテンダーとして青春時代を横浜で過ごした後、2003年に文部科学省入省。研究振興や高等教育に関する業務を経て、本年4月より現職。苦手の英語を駆使して、英国の複雑な高等教育や学術研究と格闘する毎日。酒は飲むのも飲まれるのも大好き。好きな言葉は「千鳥足」。



加賀 涼子 Ryoko KAGA (国際協力員)

福井県出身。ウエールズとピアノをこよなく愛する27歳。先月、人生2度目の麻疹を発症し、滞在2カ月目にして現地に入院。おかげで、大好きなビールも当分自粛を余儀なくされる。2006年大阪大学に就職。4年間の人事業務を経て、憧れの国際交流業務への転向を決意。2010年よりJSPS国際学術交流業務研修に参加。1年間の東京勤務の後、本年4月より現職。

は最近耳が慣れてきた気がします。カカシ先生の写輪眼を使ってネイティブが使っている言い回しをコピーさせてもらってますよ。聞き取れなかった単語が聞き取れるようになるのは本当に嬉しいことで、それを自分で使ってみるよう努力しています。僕がどこで英語を覚えているかトークではれちゃいそうですね(笑)。

—今後の抱負を聞かせてください。

高橋 日本人は年齢よりも若く見られがちで、僕なんかは飲み屋では必ず「IDを見せろ」と言われます。まずは本場のダンディズムを身につけなきゃと思っています(笑)。ロンドン是世界の中心。こんなステージで仕事ができるなんて幸せです。いつ頃に十分な語学力と積極性をもってやっていけるようになるのか不安ですが、英国の関係機関と協働で「何か」大きな仕事をやってみたいと思っています。

齋藤 2004年に青年海外協力隊でジャマイカに2年行っていたんです。すごくよい経験でしたがもっと英語が上達したかったので、いつか先進国で仕事がしたいと思っていました。ここでしかできない経験ができる毎日です。チャレンジをしない理由はな



いように思います。

松尾 赴任早々腹痛に悩まされました。ネットで調べると癌やもっと重い病気の症例があつてとても不安な時期でした。僕は枕が違っては眠れない、水が違ってはお腹の調子が悪くなる虚弱体質なのかとがっかりしましたよ。結果的になんでもなかったんですが。結局あの銀行のカードは届かなかったんです。それで電話して取りに行つて

やつとの思いでGETした後に気づいたのが、カードは日本の実家に送られていたんです。この国はいったいどうなっているんだと思いましたよ。オイスターカード¹もそうです。これさえ手に入ればロンドン市内は自由自在ですよ。ただどいったんその機能を失ったらとんでもないです。お金はあるのに深夜のロンドン中心でバスにも乗せてもらえず彷徨ったことがあります。郷に入ら

ば郷に従えといいますが、その国のルールを理解すること、それがこの国で生き延びる術なんだと学びました。

加賀 私はJSPS東京本部に在籍したときに二国間交流事業を担当していました。こちらに来てわかったことはMoUを結んでいない関係機関とも強いコネクションがあるということです。そのような機関と将来MoUを締結するお手伝いなどができたらいいなと思っています。松尾くんもがんばりやー。

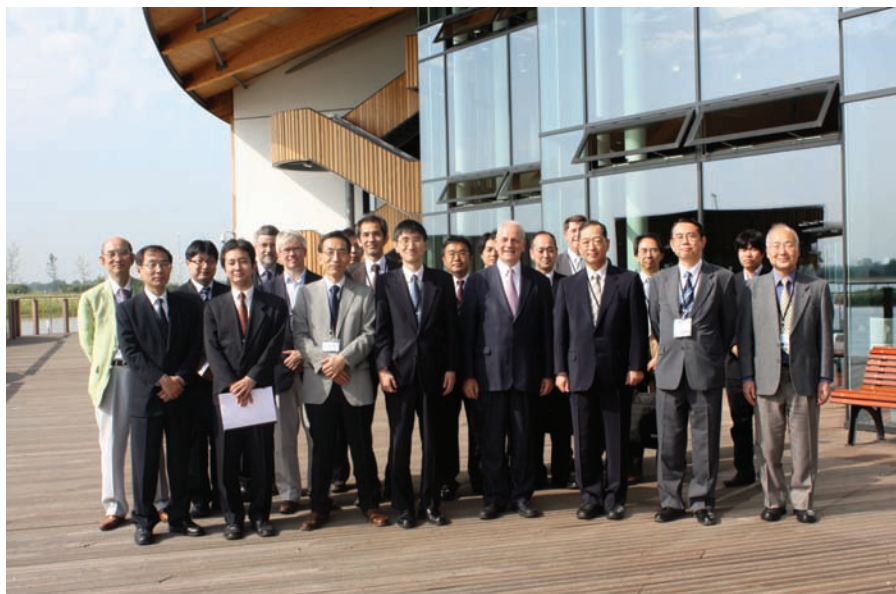
話は尽きないですね。続きはThe Bree Louise² でやりましょう。Cheers!

¹ オイスターカード: 日本でのSUICA、ICOCAのような交通系ICカード

² The Bree Louise: 2009年 Pub of the Year を受賞した当オフィス近くにあるパブ。



University of York シンポジウム [1/2]



日本からの招待講演者とRon Cooke Hubにて

2011年6月27日～29日、University of York において JSPS York-Tohoku Research Symposium on “Magnetic Materials and Spintronics” (コーディネーター: Dr. Atsufumi Hirohata) が開催された。当シンポジウムは、ロンドンセンターが実施する日英シンポジウム開催スキーム (Symposium Scheme for Japanese researchers based in the UK) で採択されたものである。当シンポジウムには、York、東北両大学をはじめ、日英独におけるMagnetic Material分野から総勢133名の研究者が参加した。ロンドンセンターからは、平松センター長他3名が出席した。

1日目は、Professor Brian Cantor, Vice-Chancellor of University of York、植木俊哉東北大学理事、平松センター長の開会挨拶に始まり、午前から午後にわたって2回のResearch seminar sessionが行われた。各セッションでは、Magnetics Materials and their applications 及び Magnetic patterned structuresの研究内容について、各スピーカーから発表があった。夕方には、東北大学の大野英男教授の特別講演 “Spintronics meets semiconductor integrated circuits” が催された。当講演は、University of York で実施する、Cantor Nanoscience Lecture の一環として行わ

れたものである。Cantor Nanoscience Lectureには、毎回当該分野のトップクラスの研究者が招かれているとのことで、昨年は、ノーベル化学賞受賞者Sir Harry Kroto が講演者であった。大野教授は講演の中で、スピントロニクスデバイスに関する最新の動向に触れ、特にトンネル磁気接合の機能に関する研究内容を紹介された。講演終了後の質疑応答では、会場を交えて活発な意見交換が行われた。

2日目は、初日に続き、Research seminar sessionがあり、Half-metallic ferromagnets and spin memories及びSpin-current devicesの両分野における発表が行われた。午後には、Research promotion sessionが設けられ、JSPS、Engineering and Physical Sciences Research Council (EPSRC)、科学技術振興機構 (JST) の3つの学術振興

機関から、日英の研究者を対象とする助成プログラムについて説明があった。ロンドンセンターからは齋藤副センター長より、JSPSの概要及び国際交流プログラムについて、個人・グループ・機関の交流単位ごとに段階を追ってプログラムを設けていることなどについて紹介した。

また、シンポジウム2日目になると、参加者同士が徐々に打ち解けあい、コーヒブ레이크やレセプションの時には、ポスターの前で研究内容を語り合うなど、今後のコラボレーションについての会話が交わされていた。JSPSの一員として、研究者同士のネットワークが形成される場を間近で見られ、また、研究者から直接話を聞くことができたのは、非常に嬉しいことである。今後もこのような交流を続けられるように、貢献していきたい。

大野英男教授による特別講演



最終日は、Research seminar sessionでSurface and interfacial magnetismにおける発表が行われ、東北大学側のコーディネーターである東北大学の高梨弘毅教授の閉会挨拶により、シンポジウムは幕を閉じた。また、終了後にはUniversity of York 内の3つの研究室を訪問する機会が設けられ、多くの研究者が最後まで興味深く参加していた。

University of York シンポジウム [2/2]

「日英シンポジウム開催スキーム」とは？

ロンドンセンターが、日本の学術研究のプレゼンス向上、日英共同研究促進、日本の大学の国際化支援を目的として、2010年度より立ち上げた事業。採択実績は、2010、2011年度ともに各3件。今年度は、本シンポジウムのほかCardiff University “The Cornea and Tissue Engineering” (2011年8月18～19日開催、コーディネーター：Professor An-

drew Quantock)、Cancer Research UK “Interdisciplinary Approach to Senescence Study” (2012年2月10～11日開催、コーディネーター：Dr. Masashi Narita) の2件が開催される予定である。

※詳しい支援内容等は、[19ページに掲載](#)。
(加賀)



ポスターセッションの様子

パブのDivision bell



えっ?と思いませんか?パブにDivision bellがあるなんて。Division bellとは、英国議会で採決 (Division) 前に鳴らされるベルのことで、これが鳴ると8分後に議場の扉が閉ざされます。それが議事堂外のパブにつけられているのです。ビッグベンを眺めながら同僚と議論している議員さんは、ベルを聞くとグラスを置いて議場に走るという次第。「パブ」は日本語にすると「居酒屋」でしょうが、その機能を私なりにあげると他に「喫茶店」



平松幸三の ご存じですか?



「食堂」「旅館」「集会場」「公民館」「風呂屋」「遊び場」「芸能会場」などなど多彩です。Division bellがパブにまでつけられている事実が端的に示しているように、パブは集う空間、人に会う場で、たしかにアルコールは口にしますが、それは酔うためではなく、交際をスムーズにするための潤滑油と言えるでしょう。国会開会中にビールと言っても、この国は飲酒に甘いわけではありません。飲みすぎて醜態をさらすと、間違いなく厳しい評価が下されます。

The 絆 kizuna



【略歴】
松永 賢誕
(まつなが さとのぶ)
1994年文部省学際局。
1997年JSPS London副
センター長。以後、文科
省初中局、振興局を経て、
2009年より在英日本国
大使館勤務。

在英大使館 松永氏に聞く

伝えるべきものは形あるものだけではありません。獲得した知識や経験、そして思いもまた次の世代に伝えてゆかなければならないものです。先輩たちへのインタビューを通して、ロンドンセンターの過去・現在・未来へと続く「絆」を手繰り寄せます。

記念すべき第一回に2代目副センター長、現・在英日本大使館参事官松永賢誕氏にお越しいただきました。

聞き手 齋藤(副センター長)、加賀(国際協力員)

ー赴任当時を振り返って、よかったこと、大変だったことを教えてください。

自分が小さく感じた

ロンドンセンター赴任の内示は突然だった。海外赴任に特に強い希望があったわけではない。でも今ここにいるのは間違いなく

あの赴任があったからだ。今でも鮮明に覚えているのが、外国人登録のために行った役所の待合室だ。あの雰囲気には圧倒され、自分が小さく感じた。マイノリティの中のマイノリティなんだ、そしてその瞬間「(海外赴任生活が) はじまったな」と思った。

2代目副センター長として

英国に進出したばかりのJSPSの知名度を上げるため、いろんなレセプションに出かけワイン一杯ひっかけ(笑)、人の輪に飛び込んでいって名刺交換をした。

思い出深いのは、日本ではお目にかかることができないような著名な研究者と仕事を一緒に出来たことで、特にケンブリッジ大学で行ったシンポジウムには、Sir Harold Kroto (1996 Nobel Prize) や野依良治先生にもご出席いただきました。Sir Haroldは、アメリカでの勤務終了後、シンポジウム当日の朝到着便で来英というハードスケジュールで大変光栄であった。また、空港まで野依先生を自分の運転でお送りした道中は緊張した。

小さいとはいえ一つのオフィスを切り盛りする責任と当時1ポンド240円という環境で、事務所の会計業務も大変だった。

よかったこと

一番よかったことはロンドンで奥さんと出会えたことですかね(笑)。

ー現在のお仕事について教えてください。

日本が「住む・働く・勉強する」魅力ある国であること

在英日本大使館で教育・スポーツを担当している。JETプログラム、国費留学生が教育担当として主なものだが、特に東日本大震災後、日本が「住む・働く・勉強する」

魅力ある国であることを、いかに英国内にアピールしていくかということが現在の課題。スポーツ担当としては来年のロンドンオリンピック対応。日本から英国に来られる要人対応や、観光客の安全確保、選手の応援、など。どれぐらいの仕事になるか、想像がつかない。やりがいのある仕事ではあるが、期待と不安が入り混じった感じだ。

ー先輩からロンドンセンターの果たすべき役割と応援メッセージをお願いします。

ロンドンセンターの果たすべき役割

「外特の選考を任せてほしい」「センター独自の事業を持たせてほしい」という2つのことは、本部にリクエストしていた。今は実現していると聞く。これらのことは、大事にしていってほしい。また、当時は同窓会のような組織は重要だと思っていたが、なかったもので、Pub貸切でレセプションをしたことがある。同窓会のサポートは重要。

現在の職務を通じて感じることは、日本の影が薄い、日本はもはや「黙っていても一目置かれる存在」ではなくなっているのでは。英国にとって重要なカウンターパートであり続けるために、自らアピールしなければならない。

先輩からひとこと

ロンドンには芸術でも、食事でも、世界中からいろいろなものが集まっているので、ぜひ楽しんでください。

小野理事長 ロンドンセンター来訪

2011年5月31～6月1日、JSPS東京本部より小野理事長・角田総務部長・関戸研究協力第一課係員の3名が当オフィスを訪問した。ロンドン滞在中には、医学研究支援団体であるWellcome Trustへの訪問の他、Dr. Kingsbury UK-JSPS同窓会長との昼食会を行った。

ロンドンセンター訪問の際には、英国学術振興機関の各研究分野におけるインパクト重視の中期目標・予算編成の動向について協議するとともに、英国大学における授業料値上げ、国内の物価上昇、VISA制度の変更、来年のロンドンオリンピック開催に伴う影響に関する話題が挙がった。

ロンドンセンターから徒歩数分に位置するWellcome Trustでは、団体の活動内容及び一般向けに無償公開している「ウェルカム・コレクション」についての説明を受けた。

Dr. Kingsbury同窓会長との昼食会の際には、特に同窓会員を対象とする事業であるFURUSATO AwardやBRIDGE Programmeについて、平松センター長も交えて意見交換が行われた。なお、FURUSATO Awardはロンドンセンターが独自に行っている事業であり、サマープログラムから外国人特別研究員へステップアップするため、またはBRIDGEと同様に、フェローが外国人特別研究員や外国人招へい研究者事業の終了後に再来日する際に、さらなる共同研究を模索するためのプログラムとしても利用されている。



小野理事長、ロンドンセンター職員と



ウェルカムコレクションの説明を受ける小野理事長 Wellcome Trustにて

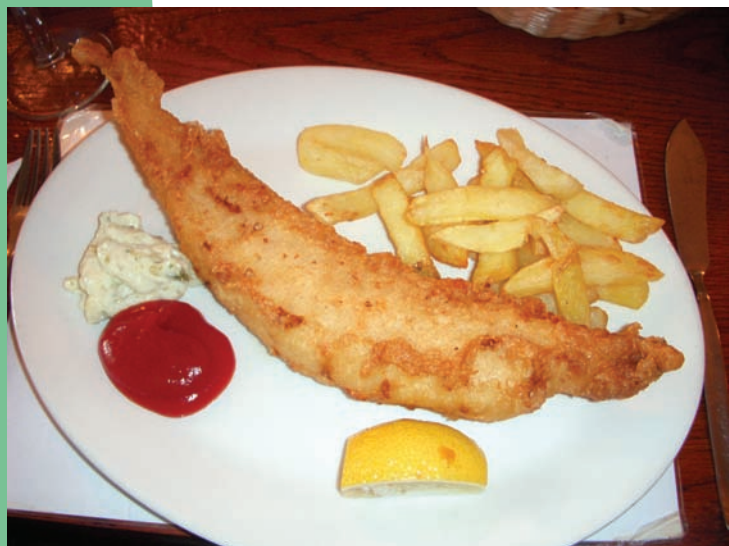
Wellcome Trustとは？

今年で設立75周年を迎えるWellcome Trust。アメリカ生まれの製薬実業家Sir Henry Wellcomeによって1936年に設立され、現在約500名のスタッフを抱える同団体は、「卓越した若手研究者の支援」「応用研究の促進」「歴史的・文化的背景における医学の探求」という3つの大きな目的のもと活動を行っている。生物医学研究への資金助成は毎年6億ポンド※にも及び、ヒトゲノムの解読や抗マラリア剤アーテミシニンの開発、精神疾患に対する認知療法の開拓などに役立てられてきた。また、生物医学研究、科学技術移転、国際医療、医学史研究等に対するファンディングスキームとして、研究費補助金やフェローシップ、院生・学部生向けプログラムの他、研究者雇用などへの助成を行う。なお、施設内にあるギャラリーや図書館は無料で開放されており、社会において生物医学研究に対する科学的理解を深めることも重要な使命と位置づけて活動を行っている。

※約780億円(1ポンド=130円換算)。JSPS平成23年度科研費予算2,264億円

(松尾)

知っているようで知られていない「Fish and chips」A to Z



英国の国民食Fish and chips

Fish and chipsにはどんな魚が使用されているのかご存知でしょうか？最もポピュラーで一般的なのが、cod(タラ)です。codよりも一回り小さなhaddock(ハドック)も人気で、店によってはplaice(カレイ)が使われることもあります。

北海に生息するcodが激減

現在、英国市場における20%近くの魚がFish and chips店で販売され、年間3億食が消費されていると言われます¹。しかしながら、Fish and chipsで使用されるcodのうち、英国内で水揚げされたものはわずか5%のみ。残りの大部分は他国からの輸入に頼っているのが現状です。19世紀末、

底引き網漁の技術革新と冷凍設備の発達によって北海で獲れるcodが安価で入手できるようになると、Fish and chipsは労働者階級の日常食として急速に広まっていきました。第二次世界大戦下では、家庭向けの魚が配給制限された影響でFish and chips店に多くの人が詰めかけました²。その後も国民の間で高い人気を維持してきましたが、1990年代に入ると北海に生息するcodが激減。ICES³の調査では、1965年～1985年にかけて年間平均25万トだった漁獲量が、2000年には4万トにまで

落ち込んでいます。その最たる要因として挙げられるのが無秩序な乱獲です。この危機に対応すべく、欧州委員会は2002年の共通漁業改革の一環として“Cod Recovery Plan”⁴を策定し、2004年より北海及びその周辺海域における資源の安定化に向けた取り組みをEU各国で行っています。

Fish and chips は金曜日に食べる？！

英国料理を代表するFish and chips。その歴史は意外と浅く、1860年にJoseph Malinがロンドンに開いた店が最初だと言われています。Fish and chipsの起源は分かっていませんが、fried fishに言及した

初めての出版物は文豪チャールズ・ディケンズの「オリバー・ツイスト(1837年)」であるとされています^{5,6}。

一日のうちでも夕食時に食されることが一般的だったFish and chipsですが、今でも店舗における販売数の80%は夕食時間帯に集中しています。また時間帯だけでなく、伝統的に決まった曜日に食べられてきました。それが金曜日です。カトリック教において、四旬節中には食事の節制を行う慣習があり、特に受難日である金曜日には肉食を慎む代わりに魚を食べることは、Fish and chipsを食べる時にも引き継がれていったようです。また保存がきくため、土日に買い込んだ食材を調理して翌週の金曜日に食べることができるとも言われています。

今後の発展のカギを握るNFFF

今や世界中から認知されているFish and chipsですが、その組合たるNational Fed-

eration of Fish Friers(以下、NFFF)にはおよそ8,500ものNFFF会員店が存在し、Fish and chipsの普及と質保全を目的に、プロモーション活動及び会員向けの情報提供を行っています。NFFF独自のFish and chipsトレーニングプログラムも設けられ、美味しいFish and chipsの作り方講座の他、産業の歴史やマーケティング、VAT⁷についての講義も行います。NFFF発行の機関誌“The Fish Friers Review”2011年5月号を読むと、夏場に向けた店内冷蔵設備とハエ対策が紹介されるほか、フライレンジ新製品の案内や店舗不動産売買情報が掲載されており、会員にとってはかなり実用性に富んだ内容となっています。

NFFFの活動は多岐に及び、No.1のFish and chips店を決める“The National Fish & Chip Awards”や若手登竜門“Young Fish Frier of the Year”が催されるなど、Fish and chipsの発展に寄与しています。(松尾)

¹ Seafishウェブサイトより。Seafish：英国水産業の持続的発展を支援する漁業組合 <http://www.seafish.org/>

² Resources for Learning in Scotland (RLS) ウェブサイト掲載Fishing News記事(Pathfinder Pack on World War II:Rationing)より。RLS:スコットランドの社会・文化・産業的遺産に関するデータソース。 <http://www.rls.org.uk/database/record.php?usi=000-000-001-467-L>

³ The International Council for the Exploration of the Sea(国際海洋探査委員会)。北大西洋に生息する海洋資源やエコシステム、海洋環境に関する研究の支援・促進を行う。<http://www.ices.dk/aboutus/aboutus.asp>

⁴ cod漁獲量回復に向けた初の長期プラン。北海の他、アイリッシュ海やスコットランド近海、デンマーク・ノルウェーに囲まれた海域も含まれる。http://europa.eu/index_en.htm

⁵ NFFFウェブサイト'Fish & Chips - A History'より。<http://www.federationoffishfriars.co.uk/pages/fish---chips---a-history-80.htm>

⁶ Guardian online, 評論家Jay Raynerへのインタビュー記事, 19 January 2003 <http://www.guardian.co.uk/lifeandstyle/2003/jan/19/foodanddrink.restaurants>

⁷ ValueAddedTax(付加価値税)。物品および役務の公的または私的な消費に対し課税される。英国でのVATは現在20%。NFFFではVAT課税0%に向けた取り組みが行われている。

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 開催



セミナー参加者とロンドンセンターにて

2011年5月20日、JSPSフェローシップ事業により渡日予定のフェローを対象とした、Pre-Departure SeminarがJSPS Londonで行われた。ここで言うJSPSフェローシップ事業とは、サマープログラム、外国人特別研究員及び外国人招へい研究者の3事業を指し、当セミナーではフェローに対して、渡航前に日本での研究・日常生活に関する情報提供を行い、派遣に際しての不安をできるだけ少なくすることを目的としている。ロンドンセンターでは毎回多数のフェローが参加しており、今回も34名（対象者48名）が足を運んだ。

当セミナーは平松センター長の開会挨拶に始まり、続いて、参加者全員が順番に自己紹介を行い、お互いの研究分野など情報をシェアすることにより、フェロー同士の関係づくりを行いやすくなった。最初のプレゼンテーションとして、JSPSから、本会概要及び各フェローシップ事業概要、JSPS東京本部の東日本大震災における対応についての説明を行った。次に、JSPSの対応機関である、Royal SocietyとEPSRCから、日本との交流事業について説明があった。その後、2名の同窓会員から、在日中の経験について話があり、日英間の研究室の文化の違いや、日本独自のエチケットや銀行、公

共交通機関、生活用品など実用面でのアドバイスがあった。質疑応答セッションでは、3月11日の地震の影響について質問を受け、被災地の情報に加えて、VISA取得や滞在費の支給などJSPSの具体的な対応についてできる限りの情報を提供した。

セミナー終了後には、フェローと同窓会員間のネットワーク作りを目的としたAlumni Eveningが行われた。Kingsbury同窓会長は開会挨拶の中で、同窓会員が対象となるBRIDGE ProgrammeやFURUSATO Awardなどの再招へい事業や日英シンポジウム開催スキームの今後の展開に触れた。Alumni Eveningではお寿司などの和食が提供され、参加者は日本の味を楽しみつつ、他の参加者との会話を弾ませており、終始和やかな会となった。

(Watson)



Kingsbury同窓会長による開会挨拶

セミナー参加者からのコメント

Ms. Yuya Lin (Oxford University),
JSPS Short Term Postdoctoral Fellow

JSPSだけでなくRoyal SocietyとEPSRCからも助成制度の話聞いたのは、学術研究の道に進もうと考える人にとって大きな助けになります。また、過去の派遣者の話も大変参考になり、滞日中に何が出来るか、渡日前に何をすべきかについての情報を得ることができました。最後の質疑応答で、東日本で発生した地震、津波に関する状況説明があったのはよかったです。Alumni Eveningでは、他のフェロー及び同窓会員と知り合え、お互いの連絡先を交換する機会が得られたことは、滞在準備の際に相談したりできるのでとても役立ちます。素晴らしいイベントをありがとうございました。

Dr. Felicity James (Leicester University),
JSPS Invitation Fellow

とても励みになるイベントでした。中でも全員に自己紹介をさせるのは、お互いを知ることができ、情報交換の際にも役立つのいいアイデアだと思います。また、2名の若手ポスドクからの報告は、日本での研究及び社会生活に関する実用的なアドバイスを聞くことができ、特に日英の研究室の文化や研究方法の違いについてのフィードバックが面白かったです。同窓会が行う支援制度は知りませんでしたが、同窓会員に直接会って、将来申請できる事業や、滞日中に始まったコラボレーションを継続させる方法について語り合えたのは、とても有益でした。このような場を設けていただき本当に感謝しています。

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening
http://www.jsps.org/event/11_0520.html

外国人特別研究員(欧米短期) 2011年度第2回募集締め切る

6月1日、JSPS外国人特別研究員(欧米短期)の2011年度第2回募集を締め切った。今回の募集は、2011年11月1日～2012年3月31日の間に来日する研究者が対象であり、全体で28名の応募があった。これは、例年と同水準の申請数である。東日本大震災直後に行った募集であったにもかかわらず、震災の影響がさほどなかったことは、JSPSとして非常に喜ばしいことである。

申請者の内訳を見てみると、まず所属機関別では、特にUniversity College London、Oxford University、University of York、University of Nottinghamからの申

請者が多い。中でも、University of York、University of Nottingham はともに、昨秋にJSPS事業説明会を行った大学である。日本での受入機関では、東北から近畿地方の各大学に散らばっており、大学以外では理化学研究所や物質・材料研究機構を希望する申請者も見られた。

研究分野別には、自然科学系から23件、人文・社会科学系から5件、それぞれ申請があった。自然科学分野では応用数値と物理学分野が多くを占め、他に薬理学、地質学などの分野からの応募があった。また、人文・社会科学分野では、日本学、考古学、人類学、教育学の分野から申請が集まった。

渡日前オリエンテーションの様子



JSPS Londonでは、英国の機関に籍を置くEU諸国、スイス、ノルウェー及び北米出身の研究者の申請を受け付けている。

申請者の国籍別では、英国のほか、アメリカ、ドイツ、アイルランド、イタリア、スイス、スペイン、ベルギー、ギリシャの各国出身者から応募があった。なお当オフィスでは、研究者の所属機関が英国にある場合、EU諸国及びスイス、ノルウェー、北米諸国出身者からの申請も受け付けている。

自然科学系はEPSRC等のResearch Council、人文・社会科学系はBritish Academyからそれぞれ紹介を受けた審査員及び在英日本人研究者による書面審査を行ったのち、当センターにおいて審査会を行う。その結果を受けて、JSPS東京本部への推薦者を決定する。

外国人特別研究員事業とは？

本事業は、期間別に一般・欧米短期・サマープログラムの3つに区分されており、今回募集した欧米短期は、1～12カ月間の範囲で来日する外国人研究者に、日本への渡航費・滞在費等を支援するというものである。JSPS Londonでは、年2回(6月1日及び12月1日締切)募集を行っているが、当募集による枠とは別に、JSPS東京本部に直接申請する募集もある(年6回)。

(加賀)

JSPS 外国人特別研究員事業

<http://www.jsps.go.jp/j-fellow/index.html>

<http://www.jsps.org/funding/programme.html>

(JSPS London ウェブサイト)



採用時に配布される
「来日外国人研究者のための生活ガイドブック」



ウィリアム王子は、結婚前父の称号（Prince of Wales）から Prince William of Wales と呼ばれていた。それをモジって Royal Wedding 記念として作られたエール。
プリンスオブウェールズ、プリンスオブエールズ……。イギリス人もこういう駄洒落好きなんですね。
ちなみに結婚後公位を得、Prince William, Duke of Cambridge と称するようになった。

英国内における震災支援

2011年3月11日、この日東日本で発生した地震、そして津波は地球全体を震撼させた。発生後ほどなく、世界中のメディアが津波などの映像を大々的に報道。英国内でも同様に、BBCをはじめ連日トップニュースとしてその惨状が伝えられた。

東日本大震災の支援を掲げたチャリティイベントや専門家を集めたシンポジウム、フォーラムなどの各種イベントが英国内の随所で開催されてきた。また、大学等の機関・団体においては、被災した研究者・学生に向けた支援を打ち出したところもある。そのうち、筆者が参加したイベント及び JSPS London にて把握している大学・研究機関等による支援の情報を、以下で紹介する。

各種イベント

“Countermeasures for the Great East Japan Earthquake” (於 JETRO London)

4月21日に開催されたイベントで、震災の被害や経済的損害、福島原子力発電所の危機等による日本に対する過度な不安を払拭するため、JETRO London と在英日本国大使館が共催で情報提供の場を設けたもの。同発電所の事故と破損の状況や主要都市における放射能レベル、食料品及び水道水の供給、日本の港・空港の安全状況などが説明された。日本への渡航やビジネスの安全性を呼びかける内容であった。

“After the Shock: Prospects for Recovery and Reconstruction in Post-quake Japan” (於 SOAS)

5月16日に開催されたイベント。震災後の復興への見通しをテーマとして、英国の機関・団体等から招かれた異なる分野の専門家4名をパネリストとして囲み、ディスカッションが行われた。当日は、会場も交えて、原発問題やその地域に住んでいる人々のケア、ボランティアの実施についてなど、多岐にわたる意見が交わされた。

大学・研究機関等による支援情報

University of Edinburgh

東北・北関東・北海道の各地方に3年以上居住している者を対象とする、“Edinburgh Global Japan Earthquake 2011 Masters Scholarships” というプログラムを提供。マスターコースにフルタイムで在学できることが条件で、採用枠は6、採択者には£10,000を支給する。期間は1年間。2011 - 2012年度の募集は既に終了。

Edinburgh Global Japan Earthquake 2011 Masters Scholarships:
<http://www.ed.ac.uk/schools-departments/student-funding/postgraduate/international/region/japan>

University of Warwick

ウェブサイト上に、どこに相談したらいいか、状況別にその部署と連絡先が細かく記されている。また、学生・教職員の氏名

入りの安否確認や学内のチャリティイベント情報も掲載。

また、震災の影響で日々の研究に支障が生じている日本人研究者を対象としたスキーム “Summer of Support for Japanese Researchers” を立ち上げている。本スキームは、University of Warwick 所属の研究者から推薦された者が、7月～9月の間で8週間を上限として研究滞在を行えるというもの。採用枠は、フルタイムの研究者が6つ、PhD 学生及びポスドクが6つであり、大学は宿泊場所及びその他研究に必要な設備等を提供する。募集は2011年7月22日に終了。

上記スキームと並行して、“Warwick International Programme in the Leadership of Higher Education (WIPLM)” に、2つの日本人参加枠が設けられた。期間は2週間で、必要経費は University of Warwick と参加者の所属大学で折半、としている。募集締切は2011年7月31日。

Situation in Japan: University support:
<http://www2.warwick.ac.uk/insite/newsandevents/intnews2/tsunamijapan/>
Summer of Support for Japanese Researchers:
<http://www2.warwick.ac.uk/services/international/japan-support/>
Warwick International Programme in the Leadership of Higher Education (WIPLM):
<http://www2.warwick.ac.uk/international/wiplm>

日本科学サポートネットワーク (NSSK)

東日本大震災に対する国際的な救援活動を統合するための総合データベース。本デー

タベースを通じて、各研究機関・研究室は提供可能なポジションや助成金情報を登録することができ、登録された内容は自由に検索できるというもの。2011年7月13日現在、英国は2件登録あり。

日本科学サポートネットワーク
<http://www.nipponsciencesupport.net/>

University of Leeds

大学本体が、Japan Society の行う募金活動をサポート。ウェブサイトには、関連イベントや日本人在学生向けの情報、最新の震災情報の提供などについて掲載されている。また、24時間対応の全学共通の連絡先（電話番号）も設けている。

Japan earthquake and tsunami – support and advice:
http://www.leeds.ac.uk/news/article/1577/japan_earthquake_and_tsunami__support_and_advice

大和日英基金

British Council 東京と共同で、“Daiwa Foundation Tohoku Scholarships” というプログラムを提供。東北地方の日本人学生で、英国の教育機関で一定期間学びたい学生の支援を目的としている。2011、2012、2013の各年度に開始する、学部・大学院・英語コースなどの課程が対象。総額£250,000の予算を採択者に配分。採択者には学費・滞在費・渡航費が支給される。締切は2011年8月31日。

Daiwa Foundation Tohoku Scholarships:
<http://www.dajf.org.uk/wp-content/uploads/Daiwa-Foundation-Tohoku-Scholarships-Publicity.pdf>

(奥村)

立命館大学英国事務所開所記念シンポジウム



Sir Graham Fry による開会挨拶

5月23日、School of Oriental and African Studies (SOAS) にて、立命館大学英国事務所開所記念シンポジウムが開催された。このイベントは、両大学間の連携体制発足を記念して企画され、JSPS London も大学国際化支援の一環として後援した。Session 1 では、Sir Graham Fry 元駐日英国大使が、日英関係の戦略的重要性と学術交流促進の意義をテーマに講演した後、公・民・学術界から招かれた方々によるパネルディスカッションが行われた。Session 2 では、未来における芸術・文化・テクノロジーの重要性と博物館の役割について、両校の

教授らによる講演及び研究発表がなされた。Session 3 では、高等教育における英・日・アフリカの三国間連携の展望に関する林景一駐英国日本国大使らの講演後、会場も交えて活発な意見交換が行われた。研究者や学生に加え、日本やアフリカの公的機関からも多数の参加者があり、日英大学間協力の可能性に寄せられる注目の高さを窺い知ることができた。今後、この連携体制の更なる発展を見守りたい。

(奥村)

Q 英国人よりも
外国人の英語の方が
聞きやすいって本当ですか？

ロンドンには移民が多く、街中では様々な訛りの英語を耳にします。英語がわかりづらいと思ったら実は英国人で、逆に聞きやすいと思ったらアジア系移民・・・ということがよくあると聞きましたが、この話は本当でしょうか？

A 近年、街で話される英語は急速に変化しています。特にロンドンでは、英語を母国語とする人より英語を母国語としない人と話すことが日常的。これまでは、グラスゴーやコックニー（ロンドン下町）など、その地域特有の方言や訛りでその人の出身がわかりましたが、最近では、とても流暢に英語を話す外国人が増えており、見抜くのはたやすいことではありません。

語学能力に自信をつけたい人は、できるだけネイティブの英語に触れたいという人が多いでしょう。しかし一方でこういう意見も。外国人同士なら、完璧な発音と文法を使わないといけないというプレッシャーがないから、リラックスした状態で会話ができて、英語もわかりやすく感じる、というものです。

ポイントは、私たちが相手とどのようにコミュニケーションをとるかということ。英語は使う人たちの影響で絶えず進化しているので、何が「ネイティブ」かということも時代とともに変わっていくのではないのでしょうか。

ぼりーさんの
英国玉手箱
t a m a t e b a k o



日本人の素朴な疑問に英国人ぼりーさんが答えてくれます。なにか疑問に感じたら、
①氏名 ②所属 ③住所 ④質問事項を明記のうえ、ニュースレター編集室
enquire@jspm.org まで、お送りください。質問採用者には粗品を差し上げます。

2分でわかる英国高等教育の今後【1/2】

Point

- 2012年からの平均授業料、£8,000以上
- 入学定員管理の緩和により、85,000人の追加入学枠を設定

Introduction

英国の高等教育は大きな変革の時を迎えている。昨年10月、政府が、2014 - 15年度までの今後4年間の「包括的歳出見直し：Comprehensive Spending Review」を発表。これにより、高等教育を所管するBIS¹の予算は、2011年度からの4年間で25%の削減目標が設定され、そのうち、大学への運営費交付金については、段階的に40%の削減が見込まれている。

このような緊縮財政の中、政府は、2012 - 13学事年度²からの大学及びカレッジ（以下「大学等」という。）における年間授業料について、これまで£3,290（約43万円³）であった上限を、£6,000（約78万円）から£9,000（約117万円）の範囲内に引き上げる方針を発表。1998年までは国内の学士課程学生の授業料を原則無償としてきた英国にとって、本改革は大きな議論を呼んでいる。

また、政府は、本年6月に「高等教育白書⁴」を発表。白書には、上記授業料値上げに関する考えのほか、大学等における学生の経験の改善方策やSocial Mobility⁵の向上、関連規制の緩和に向けた方針等が盛り込まれており、高等教育システム改革の

全体像を描いた文書となっている。

本報告においては、7月に担当機関より発表のあった、来年度以降の授業料設定に関する動向と、6月に発表された高等教育白書のポイントを示し、来年度以降の英国における高等教育の姿を簡単に紹介したい。

来年度の授業料を取り巻く状況

7月12日、OFFA⁶は、高等教育機関123校及びカレッジ16校（計139校）の“Access Agreement”を承認したと発表した。

2012年から£6,000を超える授業料を課す大学等は、高等教育への進学機会の拡大（アクセス拡大）のための方策についてOFFAと合意（Access Agreement）を結ぶことが義務付けられている。英国には123の大学と124のカレッジがあり、今回、全ての大学とカレッジの一部が、Access Agreementを締結して£6,000以上の授業料を設定することとなる。

(1) アクセス拡大に年間£6億（約780億円）の資金投入

発表によると、£6,000を超える授業料を課す大学等は、アクセス拡大を目的とし

た活動のため、2011学事年度に年間£4億700万、2015学事年度までに年間£6億200万の資金を投入することが合意されている。なお、新設の奨学金制度“The National Scholarship Programme (NSP)”の政府支出額をこれに加えると、アクセス拡大のための支出は年間£7億3,800万に上ることとなる。

アクセス拡大を目的とした活動とは、貧困層の出身など不利な境遇にある学生に対して大学等に進学する機会を増やしていく取組であり、例えば、サマースクールの開講、初等中等教育機関との連携による生徒の向上心や達成度を伸ばす活動、学生に対する教育相談、多様なアウトリーチ活動などが挙げられる。

上述した£6億200万の内訳は以下のとおり。

- £4億1,400万：財政的支援（授業料免除額£6,900万を含む）
- £1億600万：アウトリーチ活動
- £8,200万：学生のドロップアウト防止や達成度向上を目的とした活動

(2) 授業料の設定状況

同発表において、OFFAは、大学等における2012学事年度の授業料に関して以下のような分析を行っている。

- 平均授業料：£8,393
- 上記から授業料免除分を加味した場合の平均授業料：£8,161
- 上記からNSPや大学等から学生への経

済的支援額を加味した場合の平均授業料：£7,793

- 全てのコースで£9,000を徴収する高等教育機関：わずか7%
- 大学等からの経済的支援を受けずに£9,000の授業料を課される学生数：全体の半分未満

【OFFAのプレス発表】

<http://www.offa.org.uk/press-releases/universities-and-colleges-to-increase-their-spending-on-access-to-600-million-a-year/>

高等教育白書 “Students at the Heart of the System”

6月28日、BISは、高等教育白書“Students at the Heart of the System”を発表した。政府は、本白書に基づく高等教育改革を進めることによって、財政的に持続可能な高等教育の構築や大学等における学生の経験の改善、Social Mobilityの向上等に挑戦していくことを表明している。白書は4つの領域で構成されており、各領域の要点を以下に示す。

(1) 財政改革（授業料値上げと学生ローンの充実）

● 戦後最大の財政赤字を抱える政府は、公的支出の削減を迫られている。高等教育分野では、授業料の値上げによって学生の負担が増えることになるが、初めて学士課程を受講するフルタイムの学生には、授業料の前払いを必要とせず生活費

2分でわかる英国高等教育の今後【2/2】

もカバーする額のローンを提供し、また、卒業後の収入が年間 £21,000 (約 273 万円) に達した時点から月給の一部を返済してもらう “pay as you earn” 制度を設ける。

- 同制度によると、2014 - 15 学事年度における財政支出は約 10% 増加することが見込まれるが、ローンで賄われた部分は卒業生の返済でいずれ埋め合わせされることとなる。

(2) 大学等における学生の経験改善

- 個々の高等教育機関に対する厳密な入学定員管理を緩和することで、人気の高い大学等の成長が促進されるとともに、全大学等が生き残りをかけ、学生により良い経験 (教育・評価・フィードバック・就職支援等) を提供していかなければなくなる。具体的な内容は以下のとおり。
 - ・ 2012 - 13 学事年度において、全体で 85,000 人の競争的な追加入学枠を設ける。
 - 大学は、入学試験 (A-Level) において AAB 以上を獲得した成績優秀者約 65,000 人を自由に入学させることができる。
 - 年間授業料を £7,500 以下に設定し、その価値に見合った質を有するとされた大学等は、約 20,000 人までの学生を追加入学させることが可能となる。

- ・ 政府資金に頼らない、企業やチャリティ団体からの奨学金によって賄われる学生は、定員管理の枠外とすることができる。

- カレッジをはじめとする大学以外の多様な高等教育機関に対する法的規制を緩和し、学生の選択肢の多様化を図ることにより、高等教育機関による質の高い教育への注力等につなげていく。
- 各機関で得られる資格や卒業生の就職・収入状況等に関する情報をコース毎にきめ細かく提供するよう、UCAS⁷ や各高等教育機関に促していく。

(3) Social Mobility の促進

- OFFA の独立性を保ちつつ、その機能強化を図る。OFFA は、高等教育機関による “Access Agreement” の実施状況をモニタリングし、毎年見直しを行う。
- 最貧の学生にも高等教育を受ける機会を拡げるため、2012 年から “National Scholarship Programme (NSP)” を開始し、£1 億 5,000 万を投じる。
- 貧しい境遇の学生や、入学試験で事前に表示された成績期待値よりも優れた結果を出した学生を支援するための新たな入学システム “Post-Qualification Applications (PQA)” の導入について、UCAS による入学プロセスに関する見直しの結果を待って更なる検討を行う。

(4) 高等教育新規参入機関に対する規制の緩和

- イギリスの高等教育制度への新規参入を望む全ての機関に対する単一かつ明確な規制の枠組みについて検討を行う。例えば、学位授与権の取得と更新に関する基準の見直しを行い、仕組みを単純化する。また、「大学」と称する基準に関して検討を行い、外部機関が授与する学位のために教育を提供したり、試験だけを実施したりするような小規模機関の参入を容易にする。さらに、学位授与に対する外部評価を促進するため、教育母体から学位授与権を分離させる。

【BIS のプレス発表と白書全文】

<http://www.bis.gov.uk/news/topstories/2011/Jun/he-white-paper-students-at-the-heart-of-the-system>

(高橋)

¹ Department for Business Innovation and Skills : ビジネス・イノベーション・技能省。

² 英国の学事年度は 9 月から開始。

³ £1=130 円として換算。以下同様。

⁴ 英国における「白書」とは、特定のテーマにおける政府の今後の方針を詳細に示した文書。法案の土台となることが多く、議会に法案として公式に提出される前のフィードバックを得る用途としても活用。

⁵ 階級移動能力。2011 年 4 月、Nick Clegg 副首相が、連立政権としての「Social Mobility 戦略」を発表。当該戦略は、全ての人が境遇に関わりなく可能性を伸ばせるような公平な機会を保証することを狙いとしており、大学進学も含め、人生の各段階で見られる機会の不平等性の払拭に取り組んでいくこととしている。

⁶ Office for Fair Access : 高等教育への公平なアクセスを保護・促進する役割を担う非政府公的機関。高額授業料の設定を望む英国の大学・カレッジは、OFFA と “Access Agreement” を締結する必要があり、OFFA はその承認と監視を行う。

⁷ Universities & Colleges Admissions Service : 高等教育機関へ進学する際に出願に関する処理を行う機関。進学希望者や高等教育関係者への情報提供などのサービスも行う。



Anti-cuts march 2011 年 3 月 27 日 Russell Square にて

このページでは、JSPS東京本部及びJSPS Londonにて実施する国際交流事業やイベントなどを紹介します。なお、各事業の詳細は各事業ウェブサイトをご覧ください。

◆JSPS東京本部にて募集中の国際交流事業

①【NEW】研究拠点形成事業

受付期間: 2011年9月9日(金)～10月7日(金)
詳しくは[こちら](#)

我が国と相手国の研究拠点機関同士の研究交流を支援する事業で、全世界を対象とした「A.先端拠点形成型」及びアジア・アフリカ諸国を対象とした「B.アジア・アフリカ学術基盤形成型」の2種類を募集。

A.先端拠点形成型

採用期間: 2012年4月開始 最長5年間
(2012年4月～2017年3月)
支給額: 1課題あたり年額2,000万円以内
※相手国内の拠点機関は、英国学術振興機関等からのマッチングファンド要
申請方法: 日本側はJSPS、相手国側は英国学術振興機関等にそれぞれ申請。
採用予定件数: 10件程度

担当: 国際事業部研究協力第二課
core-to-core@jsps.go.jp

②二国間交流事業 共同研究・セミナー

募集締切: 2011年9月12日(月)
詳しくは[こちら](#)

個々の研究者交流を発展させた二国間研究チームのネットワーク形成を目指し、他国の研究者と行う共同研究・セミナーの実施経費を支援するもの。英国とは、Royal Society及びESRCとの2事業を募集。

〈Royal Society との共同研究〉

支援期間: 1年以上2年以内
(2012年4月1日から2013年3月31日までの間に開始されること)
支給額: 各年度250万円以内、かつ全研究期間で総額500万円以内
対象分野: 自然科学
申請方法: 日本側はJSPS、相手国側はRoyal Societyにそれぞれ申請。
※JSPSはRoyal Societyとの合同審査を行っていないため、双方に申請書が提出されても一方のみが採用される場合があります。また、JSPSは英国側研究者の共同研究費の出所をRoyal Society に限定しておりません。
採用予定件数: 10件

※Royal Societyへの申請について
事業名称: International Exchanges Scheme
申請期間: 2011年7月18日～2011年10月17日

連絡先: International Joint Projects with Japan, Grant Section
international.jointprojects@royalsociety.org
支援期間・金額等の詳細は[こちら](#)

〈ESRCとのセミナー〉

支援(実施)期間: 1週間以内
(2012年4月1日から2013年3月31日までの間に開催されること)
支給額: 総額250万円以内
対象分野: 社会科学
申請方法: 日本側はJSPS、相手国側はESRCにそれぞれ申請。
採用予定件数: 2件
※日本・英国で各1回(計2回)、またはいずれかの国で1回の開催が可能。

※ESRCへの申請について
事業名称: ESRC-JSPS collaborative seminars
支給額: 総額£15,000以内
申請期間: 2011年9月13日16時(英国時間)
連絡先: International Team
international@esrc.ac.uk
支援内容の詳細は[こちら](#)

担当: 国際事業部研究協力第一課
nikokukan@jsps.go.jp

③多国間国際研究協力事業

予備申請締切: 2011年9月30日(金)
本申請受付開始: 2011年11月21日(月)
本申請締切: 2012年1月27日(金)
詳しくは[こちら](#)

日本、カナダ、フランス、ドイツ、ロシア、イギリス、アメリカの7カ国により実施される多国間の国際研究協力事業。グローバルな課題に対して3カ国以上の研究者からなるコンソーシアムの活動による優れた多国間共同研究を支援することを目指す。

〈日本側研究代表者申請概要〉

採用期間: 2012年4月開始 最長5年間
(2012年4月～2017年3月)
支給額: 1,500万円以内/年/件
(事務委託手数料(10%以内)を含む)
対象分野: 人文・社会科学及び自然科学
採用予定件数: 5件程度(ただし、日本の研究者による研究プロジェクト。全学術振興機関で併せて8～10の研究コンソーシアムを採択予定)

担当: 国際事業部研究協力第一課
bottom-up@jsps.go.jp

◆JSPS London 日英シンポジウム開催 スキーム【募集開始】



過去のシンポジウムより
(2011年2月10日、UCLにて)

募集締切: 2011年10月31日(月) 17:30必着
詳しくは[こちら](#)

在英日本人研究者によって組織的なレベルでコーディネートされる質の高い日英共同シンポジウムに対して、JSPS Londonが支援を行っているもの。今回より、過去に当スキームで採択された研究者を対象に、継続して日英間のシンポジウムまたは小規模のセミナー開催支援を目的とする、「フェーズ2」を設けた。

募集分野: 全分野

申請資格: 英国の大学等研究機関に在籍する日本人研究者

※他のJSPS事業(ESRCとのセミナーなど)からの支援を受けているシンポジウムは申請できない。

支援内容:

①日本からの招待講演者(5名を上限とする)にかかる渡航費、日当、宿泊費(英国内の交通費は支給できません)

②開催経費 £2,000以内

採用期間: 1~3日程度

(2012年6月から2013年2月までの間に開催されること)

採用予定件数: 1, 2件

申請方法: 以下の4点を下記宛先まで郵送により提出

①申請書(ウェブサイトよりダウンロード可)

②申請者及び共同開催者の略歴

③日本からの招待講演者の略歴(当スキームにより旅費が支給される者に限る)

④申請者の所属機関等からのサポートレター

※フェーズ2について

以前に当スキームで採択された在英日本人研究者が対象。日本側カウンターパートとの関係構築が前回のシンポジウムから進展していることが求められます。支援内容は通常のスキームと同様ですが、申請書はフェーズ2のものをお使いください。

◆JSPS London イベント情報

〈シンポジウム〉

2011年8月18~19日にCardiff Universityで日英シンポジウム開催スキームに採択された“The Cornea & Tissue Engi-

neering”が開催される予定。プログラムは[こちら](#)

今後のシンポジウム開催予定は以下のとおり。最新情報はウェブサイト順次掲載予定。

・2012年1月5~6日 Manchester University

・2012年2月10~11日 Cambridge University

※過去のシンポジウム一覧は[こちら](#)

〈JSPS事業説明会〉

JSPS Londonでは、定期的に英国内の大学等に対し、JSPSが実施する事業を紹介する場を設けている。

今後の開催予定は以下のとおり。最新情報はウェブサイト順次掲載予定。

・2011年9月30日(金) Aston University

・2011年10月11日(火) London University of Tropical Medicine and Hygiene

・2011年10月18日(火) University of Sussex

※過去の実施状況は[こちら](#)

※所属の機関にてJSPS事業説明会をご希望の場合は、enquire@jps.orgまでご連絡ください。

◆JSPS各種情報を定期的にお届けします!

・在英日本人研究者 登録システム

詳しくは[こちら](#)

JSPS Londonが開催するイベントの案内やニュースレターなどを、在英日本人研究者の方でご希望の方に送信しています。情報提供を希望される方は、上記URLよりご登録ください。なお、対象となるのは、英国の大学・研究機関に所属する研究者(ポスドク・大学院生含む)、及び在英日系企業研究所の研究者です。

・JSPS Monthly(学振便り)

詳しくは[こちら](#)

JSPSの公募案内や活動報告などを、毎月第1月曜日にお届けするサービスです(購読無料)。情報提供を希望される方は、上記URLよりご登録ください。

・留日情報登録データベース

詳しくは[こちら](#)

日本への留学・滞在研究の経験を持つ海外研究者との国際的な研究協力に関心をもち、日本人研究者等の情報を集めたデータベース。海外の同僚とのネットワークの維持や、新たな共同研究のパートナーの発見の機会を提供することで、日本と海外との長年の研究支援により培われた人的ネットワークの維持と強化に貢献することを目的としています。登録を希望される方は、上記URLよりご登録ください。

編集を終えて

この4月にロンドンに赴任し、当ニュースレターの編集を任されることになりました。ロンドンセンターには何が求められているのか。その視点のもと、多くの人に、より深く読んでいただけるような記事構成となるよう、担当なりに工夫しました。今回、特に大事にしたいと思っているのは「人」です。在英日本人研究者の方々をはじめ、多くの方が英国を舞台に活躍されています。その人々の生き生きと輝く姿、そしてその経験を多くの人に伝えたい—その思いから立ちあがった企画の一つが「JSPS London Interview」です。今回は元副センター長の松永氏にお越しいただきました。インタビューの中で、当時実現できなかったことが十数年の時を経て現実のものとなっている、というお話があり、過去の積み重ねで現在が作られているということを、改めて実感する内容のものでした。先輩の経験談は、何にも代えがたい財産となる。そのような経験をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。この「財産」を、当ニュースレターを通じて皆様方にお届けすることができましたら幸甚です。

(加賀)

監 修： 平松 幸三
編 集 長： 齋藤 智
編集担当： 加賀 涼子



JSPS London

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター(JSPS London)

14 Stephenson Way, London NW1 2HD United Kingdom

TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669

email: enquire@jpsps.org

Website: <http://www.jpsps.org/index.html>